宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法(2)

低木

誌名	九州大学農学部演習林報告 = Bulletin of the Kyushu University Forest
ISSN	04530284
著者名	内海,泰弘 村田,育恵 椎葉,康喜 井上,晋
発行元	九州大學農學部附属演習林
巻/号	89号
巻号補足	
掲載ページ	p. 51-61
発行年月	2008年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

AgriKnowledge

論　文

宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法　II. 低木*

内海泰弘**, 村田育恵***, 椎葉康喜**, 井上晋**

抄　　録

宮崎県椎葉村大河内地区における植物の伝統的な利用法と方言を記載した. 前報 (内海ら2007) では高木について述べたが, 本報では低木79種と7類 (針葉樹1種, 広葉樹78種と7類) について複数の年長者からの聞き取り調査結果をまとめた. 木部の利用としては道具の柄木に用いられる樹種が5種存在し, 道具ごとに求められる材質特性の違いに応じて樹種の選択がなされていた. 樹皮の利用としては和紙原料になる樹種が5種, 鳥もちの原料となる樹種が2種あり, 和紙原料の採取や鳥もちの製造が現金を得る貴重な手段として地区の生活を支えていた. 方言名は高木と比べて存在していない割合が高く, 約1/4の樹種には認められなかった. 理由としては過去には生活に利用されて方言名があったが時間の経過とともに名前が失われてしまった樹種と, そもそも利用する文化がなかったため名前を与えられなかった樹種があると考えられた.

キーワード：椎葉, 大河内, 低木, 方言, 伝統的利用法

---

*Yasuhiro Utsumi, Ikue Murata, Yasuki Shiiba, Susumu, Inoue: The Traditional name and usage of plant in Okawachi, Shiiba Village,Kyushu,Japan.II. Shrubs.

**九州大学大学農学部附属演習林
Kyushu University Forests, Kyushu University

***九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻
Department of Forest and Forest Products Sciences, Graduate school of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University

1. はじめに

植物方言の消失はその文化的背景の消失も意味する．九州大学農学部付属演習林宮崎演習林が所在する宮崎県椎葉村大河内地区には現在でも地域に生育する様々な植物の利用に精通した人々が生活している．しかし，椎葉村の人口は1953年（昭和28年）の14，739人をピークに減少を続け，2007年10月現在では3，307人と1953年の約2割にまで落ち込み（那須，私信），植物の方言とその伝統的利用法に関する知識の伝達は危機的な状況にある．そこで前報では大河内地区における高木類の民俗学的利用について報告した（内海ら，2007）．しかし，低木類と草本類に関しては未だまとまった報告がなされていない．

低木と高木との区別は便宜的な区分とされており（沼田，1974），2m以下を低木とすることもあるが（八杉ら，1996），5～6mを境にすることもある（Random House Australia，1999）．いずれにせよ木材として利用できる部分が高木より少なく，商業的な木材利用が図られている樹種は限られている．しかし，高木と比較して他地域との流通量が少ない分，各地域独自の利用法や方言が発達してきた可能性が高い．

一方，このことは地域独自の伝統的な利用法が高木より早く失われる可能性も示唆しており，地域特有な低木の民俗学的記録を作成することは，より緊急の課題ともいえる．そこで本研究では前報の高木類に引き続いて大河内地区に生育する低木類の伝統的な利用法とその方言について，集落の複数の年長者から聞き取り調査を行い，植物民俗学的な記載と考察を介して地域の伝統的文化の一部を保存することを目的とした．

2. 調査地の概要と調査方法

調査地の概要と調査方法は前報に準じる（内海ら，2007）．九州山地中央部に位置する宮崎県東臼杵郡椎葉村大字大河内地区を調査対象区とし，大河内地区で生を受け，幼少期から現在に至るまで当集落に居住されている年長者の中で，植物名とその利用法に詳しい73歳から78歳までの6名の方を対象者とした．2006年4月から2007年の6月にかけて低木の大河内地区での呼称とその利用法について各人に1から3回調査を行い，得られたデータは当地区出身の椎葉と，当地区にそれぞれ11年と5年，2年居住ないし滞在した井上，内海，村田とで検討を加え，複数の人から確証が得られた樹種を選抜し記載した．

3. 結果と考察

調査した低木79種と7類（針葉樹1種，広葉樹78種と7類）の学名，標準和名，大河内地区での呼称，用途等を表に示す．樹種の記述法は前報に準じた．なお，呼称や用途で数種が区別されずに用いられているものを類名として記した．

表　大河内地区における低木の方言と用途
Table The traditional usage and name of shrubs in Okawachi.

学名 latin name	類名 group name	和名 Japanese name	方言 Local name	用途等 usage
針葉樹				
Cephalotaxus harringtonia		イヌガヤ	モロメギ	実は子供のおやつ（おいしくはない）．
広葉樹				
Aucuba japonica		アオキ	ヤマダケ	家畜の飼料として冬季に採取し藁と混ぜて用いた．近年はシカの食害のため減少している．
Pterostyrax corymbosa		アサガラ	イモギ	材が柔らかく，薪になる程度．
Pieris japonica		アセビ	エナバ	葉を煎じて農薬の代用・牛のシラミ取りに用いた．
Lindera praecox		アブラチャン	ジンタンノキ	杖，焚材，炭材に適する．実はイノシシの好物といわれている．
Rhamnus crenata		イソノキ	なし	
Ilex crenata		イヌツゲ	ツゲノキ	樹皮はとりもちの原料．木部は薪材．
	イチゴ類	イチゴ類	イチゴ	
Rubus phoenicolasius	イチゴ類	ウラジロイチゴ	シシイチゴ	実は食用．
Rubus hirsutus	イチゴ類	クサイチゴ	ツチイチゴ	実は食用．
Rubus crataegifolius	イチゴ類	クマイチゴ	タカイチゴ	実は食用．
Rubus palmatus	イチゴ類	ナガバモミジイチゴ	キナイチゴ	実は食用．イチゴの中で味が一番良い．
Rubus buergeri	イチゴ類	フユイチゴ	ショウベンイチゴ，カンイチゴ	実は食用．
Duchesnea chrysantha	イチゴ類	ヘビイチゴ	ヘビイチゴ	実は食べない．
Ilex serrata f.argutidens		イヌウメモドキ	なし	
Zanthoxylum schinifolium		イヌザンショウ	ドクザンショウ，イヌザンショウ	葉は食べられない．剥いだ樹皮を揉み川に流すとヤマメが捕れた．
	ウツギ類	ウツギ類	ウツギ	
Deutzia crenata	ウツギ類	ウツギ	なし	
Hydrangea scandens	ウツギ類	ガクウツギ	なし	
Hidrangea luteo-vempsa	ウツギ類	コガクウツギ	なし	
Weigela japonica	ウツギ類	ツクシヤブウツギ	ウツギ，ウノハナ	薪材にする．萌芽枝は雑草が生えないように畑の畝の脇に並べた．
Hydrangea paniculata	ウツギ類	ノリウツギ	ノリギ	耐腐朽性が高くほだ木の支えに用いる．和紙を漉く際の粘材として内樹皮だけを剥いで搬出する「のり山師」と呼ばれる専門の山師が他所から来ていた．
Deutzia scabra	ウツギ類	マルバウツギ	なし	
Styrax japonica		エゴノキ	コヤスノキ	材に粘りがあり和傘のロクロ材として出荷した，実はサンショウの樹皮とともにつぶして川に流し魚とりに用いた
Daphne pseudo-mezereum		オニシバリ	ウシビノウ	内樹皮は和紙原料になるが，量が少なかったのでシマサクラガンピと混ぜて売った．
Broussonetia papyrifera		カジノキ	マカジ	11月頃剥皮し，外樹皮ごと乾燥させて和紙原料として出荷した．残った木部は良く燃える薪材になった．
Viburnum	ガマズミ類	ガマズミ類	イセビ，イセブ	種毎の名前はなかった．実は食用とし，霜が降った後は甘味が増した．
Viburnum erosum var. punctatum	ガマズミ類	コバノガマズミ	イセビ，イセブ	
Viburnum plicatum var. parvifolium	ガマズミ類	コヤブデマリ	イセビ，イセブ	
Viburnum wrightii	ガマズミ類	ミヤマガマズミ	イセビ，イセブ	材に粘りがあり，柔らかく折れないので玄翁の柄に適する．通直な萌芽枝を1m程の長さにして用いる．生材はよく曲がるのでイノシシを捕る跳罠（当地ではグシと呼称）の材料にも最適．
Viburnum urceolatum	ガマズミ類	ヤマシグレ	イセビ，イセブ	
Pourthiaea villosa var.laevis		カマツカ	カナモドシ，ノユス	名の由来は鋼で切っても切れないことから．材に粘りがあるので鉈や金槌の柄木に最適．ただし比重が大きいので鍬や鎌には適さない．
Zanthoxylum ailanthoides		カラスザンショウ	なし	
Stachyurus praecox		キブシ	ツキデノキ	白く発砲スチロールのような髄をスズタケの桿などを用いて突き出して遊んだ．
Clerodendrum trichotomum		クサギ	クサギナ	若葉は食用とする．湯がいた後に油で炒め，ご飯と混ぜたりヤマメと合わせるたり，味噌汁の具にする．ご飯にまぜたものをクサギナメシと呼称する．
Elaeagnus	グミ類	グミ類	グミ	当地区にはアキグミとナワシログミが生育する．実は食用，心材は黄色で美しく装飾材や柄木に用いた．
Ilex integra or Irex rotunda		クロガネモチ	ユスモチ	大河内地区には非常に少ない．
Lindera sericea		ケクロモジ	クロモジ，クロンボノキ	材が堅く杖や炭材に適する．
Hovenia dulcis		ケケンポナシ	ケンポナシ	甘味のある果柄をしゃぶる．

Boehmeria spiata		コアカソ	なし	
Broussonetia kazinoki x Broussonetia papyrifera		コウゾ	ヤマカジ	カジノキに同じ．値段が少し安い．
Euscaphis japonica		ゴンズイ	なし	燃えにくく，薪材に不適．
Cleyera japonica		サカキ	サカキ	枝葉は神事一般に用いる．
Zanthoxylum piperitum		サンショウ	サンシュウ	実・葉・新芽は食用（佃煮も美味），青い実を塩漬けにして漬物に混ぜる，材は柔らかくすり鉢の目が崩れないのですりこぎに適する．実をつぶして魚捕りに用いた．ショウロウサンを送る前日に供え物の上に葉を載せる．
Illicium anisatum		シキミ	ハナノキ，ハナシバ	葉は盆・正月・彼岸・月の初めなどに仏前に飾る．樹皮を煮た汁で牛を洗いシラミ取りに用いた．
Diplomorpha yakushimensis		シマサクラガンピ	ヒノオカジ	紙幣の原料となる．和紙植物の中で値段が最も高く，この内樹皮の採取だけで生計を立てている人がいた．人の山にこっそり入ってその場で外樹皮ごと全木先端まで剥皮し，その後外樹皮（鬼皮）を取り除いた．樹皮を180度折り曲げるようにはぎ取ると外樹皮がはがしやすい．採取は6月頃．
Sapium japonicum		シラキ	なし	
Lindera triloba		シロモジ	タケツエギ	子供が樹皮をかじって辛みを楽しんだ．材は杖．炭材に適する．
Evodiopanax innovans		タカノツメ	なし	
Aralia elata		タラノキ	ダラ	若芽は食用とし，幹は随が大きく鋸の手元を差し込みやすいので柄に適する．
Symplocos coreana		タンナサワフタギ	ヤママツゲ	材は堅く粘りがあり割れにくいので斧の柄に最適で，鉈や鎌にも良い．
Camellia sinensis		チャノキ	チャノキ	葉は5月に採取し，炒って後に揉んで，最後にまた長時間炒って作った．実からは油を取った．
Rhododendron degronianum ssp.heptamerum		ツクシシャクナゲ	シャクナン	
	ツツジ類	ツツジ類	ツツジ	ツクシアケボノツツジ以外のツツジは広くツツジと呼称
Rhododendron pentaphyllum	ツツジ類	ツクシアケボノツツジ	ヨウラクツツジ	
	ツツジ類	ミツバツツジ類	ツツジ	当地区にはコバノミツバツツジやウラジロミツバツツジなどが生育．
Rhododendron obtusum var.kaempferi	ツツジ類	ヤマツツジ	ツツジ	
Rhododendron japonicum	ツツジ類	レンゲツツジ	ドウザンツツジ	名称の由来は大河内広野地区の銅山付近に群生しており，そこからの山引き苗を庭先に植栽したことから
Skimmia japonica var.intermedia f.repens		ツルシキミ	なし	
Sambucus racemosa ssp. Sieboldiana		ニワトコ	タズ	枯木にキクラゲが良く生える，葉を食用にした．
Rhus javanica var.roxburghii		ヌルデ	フシノキ	実は塩辛く食用，葉の虫こぶ（五倍子）はお歯黒の材料とした．
Salix gracillistyla		ネコヤナギ	カワヤナギ	枝は小歳（旧暦1月14日）に紅白の餅を付けて飾る．
Lyonia ovalifolia var.elliptica		ネジキ	ミソウシナイ	焚き火をして食べ物をあぶると，灰がかかって食べにくいため，または灰の色が味噌の色に似ており，山で味噌焼きをしたところいつの間にかなくなってしまった，という山人の話から．
Symplocos myrtacea		ハイノキ	イノコシバ	枝葉を折り曲げてダツ（ススキで作った炭を入れる袋）の蓋とした．枯れても枝から葉が離れないので炭に混ざらず良かった．名の由来はイノシシの肉を包むのに具合が良かったからとも，獅子を背負うときに背中にはさんだからとも言われている．
Helwingia japonica		ハナイカダ	なし	
Maachia floribunda		ハネミイヌエンジュ	エンジュ	床柱に用いる．
Eurya japonica		ヒサカキ	ケタジャカキ	当地区では神事に用いない．
Enkianthus cernuus f.rubens		ベニドウダン	なし	
Euonymus sieboldianus	マユミ類	マユミ類	ユミギ	弓材に用いる．当地区にはマユミ，コマユミ，ツリバナなどが生育する．
Staphylea bumalda		ミツバウツギ	なし	
Edgeworthia chrysantha		ミツマタ	ミツマタ	カジノキに同じ．値段が少し安い．
Callicarpa japonica		ムラサキシキブ	なし	
Ternstroemia gymnanthera		モッコク	ブッポウ	
Viscum album ssp. Coloratum		ヤドリギ	なし	
Hydrangea sikokiana		ヤハズアジサイ	ウリバ，ウリシバ	葉にはキュウリのにおいがあり，材は硬い．
Ardisia japonica		ヤブコウジ	ヤマミカン	
Hydrangea serrata		ヤマ(サワ)アジサイ	なし	
Rhus trichocarpa		ヤマウルシ	ハゼノキ	火にくべるとはじけるため薪材に適さない．
Trochodendron aralioides		ヤマグルマ	イワモチ	樹皮はとりもちの原料（色が白色がかって美しくイヌツゲより良質）．
Morus australis		ヤマグワ	クワノキ	割れにくく，心材の耐久性が高い．造林鎌の柄，鍬の柄，柱（特に床柱），碁笥（ごけ），ほだ木の杭木になる．
Rhus sylvestris		ヤマハゼ	なし	
Benthamidia japonica		ヤマボウシ	なし	
Salix sieboldiana		ヤマヤナギ	ヤナギ	まな板や御幣を切る板に用いる．
Clethra barvinervis		リョウブ	ボウリョウ，ボリョウ	葉は食用ではない．炭材に適する．
Prunus spinulosa		リンボク	なし	

調査した樹種の木部の利用では5種が柄木に使われていた．鉈，鎌，玄翁（げんのう）といった道具ごとに必要とされる材質の特性が異なるため，それに応じて使用される種の選択が行われている．5種の中でカマツカは材に粘りがあるので鉈や金槌の柄木に最適であるが，材が重いため部材が大きくなる鍬や造林鎌の柄には好まれていない．既往の報告でもカマツカの材は割裂しにくいが気乾比重で0.86と比重が高いとされている（貴島ら1977）．タンナサワフタギも堅く粘りがあり割れにくいので斧の柄に最適であり，鉈や鎌にも良いとされる．この種も同様に気乾比重が0.86と高く，重硬，強靱で広く柄木に使われてきた（倉田，1975；平井，1996）．ヤマグワはより長い部材が必要となる造林鎌の柄や鍬の柄に用いられているが，これはカマツカやタンナサワフタギと比して比重が軽く（気乾比重で0.62），靱性に富む（貴島ら，1977）性質を利用したものであろう．カマツカは漢字で書くと「鎌柄」になるが（植物文化研究会と木村，2005），当地区で鎌の柄（つか）にあまり利用されていないのは，より軽量な樹種の入手が容易だったためと考える．玄翁でタガネを打ち込み石を穿つとき，堅い材は打撃時の衝撃が手に響くため柄木として不適であった．そこでミヤマガマズミが材に粘りがあり，柔らかく折れにくい性質を利用して玄翁の柄に使われた．タラノキの幹は比較的軽く（気乾比重で0.58，貴島ら，1977），髄が大きく鋸の手元を差し込みやすいので鋸の柄に用いられた．柄木に用いる木はタラノキを除いて使用される前に木口面を十字に四分割した．これは樹芯部分を中に含んだ部材は使用中に割れやすいためである．分割した材は囲炉裏の上で十分に乾燥させ，脱水に伴う変形，収縮が収まった後に部材を削り出し使用した．

柄木以外の材の利用としてはエゴノキの材が緻密で（貴島ら，1977），樹芯部分を取り除かなくても靱性があって割れず，旋作加工が容易で仕上がりがよい（平井，1996）ので和傘のロクロ材として出荷された．ちなみにロクロとは傘の頂端に位置し，傘骨が差し込まれる部材である．ハネミイヌエンジュはやや重硬で強度も比較的大きく靱性も高いことに加えて心材の保存性が高く（平井，1996），床柱などに良く用いられてきた．マユミ類は当地区ではその名もユミギと呼ばれ椎葉村の春の伝統行事である的射（まとい，椎葉村，1994）の際の弓の材料にもなっている．アブラチャン，シロモジ，クロモジ，キブシといった木は径はそれほど大きくならないが，材がやや堅いので当地区に限らず杖に用いられてきた（平井，1996）．アブラチャンやシロモジ，クロモジ，リョウブは炭材に適する．薪材としてゴンズイは燃えにくいため適さない．サンショウの材は強靱で折れにくく，摩滅しにくい性質を有しており（平井，1996）．スリコギに用いられている．

枝が利用される種にはネコヤナギとハイノキがある．ネコヤナギの枝は柔軟性があるので旧暦の正月（椎葉村では小歳と呼称）に紅白の餅を枝につける飾り物（メージョないしサクイワイと呼称）の材料に使われる（椎葉村，1994；内海と井上2007）．ハイノキの枝はよくしなり枯れても葉が落ちにくいことから，円形にまとめてススキで編んだ「炭ダツ」とよばれる炭を入れる袋のふたと底に使われてきた．

大河内地区では低木の利用部位として木部より樹皮が重要になる樹種が多く存在した．その主な利用は和紙原料と鳥もち原料としてである．当地区で和紙原料となる植物はカジノキ，コウゾ，ミツマタ，シマサクラガンピ，オニシバリである．カジノキ，コウゾ，ミツマタは枝ないし幹を11月頃に1.2～1.3m程度に切って束にする．農閑期の冬季にこの束を大釜に立て込み，桶をかぶせてその周りを「へば」と呼称した藁縄で密閉したのち蒸し

あげて樹皮を剥いだ．作業は屋内で行われ直径1m，高さ2m程にもなるスギ製の桶を天井から吊して上下させた．剥ぎ終えた樹皮は外樹皮と内樹皮を区別することなく乾燥させて出荷した．なおミツマタの場合は名のごとく枝が三つ叉になり束にしにくいため，全木をそのまま蒸した．樹皮を剥いで残った木部は「かじがら」とよばれ，非常に良く燃える薪材になった．一方，シマサクラガンピは6月頃に立木の状態で樹皮をはぎ取り，外樹皮を取り除いた後で出荷した．樹皮を180度折り曲げながらはぎ取ると外樹皮が剥離しやすかった．なお，シマサクラガンピは和紙原料の中で値段が最も高く，人によってはこの内樹皮の採取だけで生計を立てていた．時に他人の山にこっそり取りに入る不埒な輩もいたようである．オニシバリは量が取れなかったためシマサクラガンピに混入される程度であった．

鳥もちの原料となる植物には当地区ではイヌツゲとヤマグルマがある．当地区ではヤマグルマから得られる鳥もちは白色で美しく，イヌツゲより良質とされるが，イヌツゲと比較して採取できる個体が少なかったため，イヌツゲがおもに原料に利用されて戦前までの貴重な現金収入になっていた．イヌツゲの樹皮は7月頃から旧暦の8月15日（十五夜）まではきれいに剥がすことができる．木を伐採し，剥皮した樹皮は「ダツ」とよばれる割った竹で編んだ円筒状の袋にいれて池に沈め石で押さえる．この場所をもち田といい，樹皮を腐らせるためにたまり水が用いられる．もち田に取りおいた樹皮は1～2月頃に桶に取り上げて臼でつく．その後ぬるま湯の中で棒を用いて攪拌し，棒に付着したもちを板に上げて手で揉み，流水で樹皮を取り除き鳥もちを作る．樹皮を洗い取る人の技量で完成品の歩留まりが変わるため，この作業をする人員は基本的に固定されていた．最終的には淡黄緑色のモチが取れる．気温が高いと水にもちが流れてしまい作業が困難になるので，寒い時期に行わなければならなかった．

そのほかの樹皮利用として，和紙を漉く際の粘材としてノリウツギの内樹皮が採取された．この樹皮を取る専門の山師は「のり山師」と呼ばれ，鹿児島県や大分県から来ていた．これらのり山師の中にはそのまま地区に住み着いた人もいた．サンショウやイヌザンショウはその樹皮をダツに入れた後にたたきつぶして川に流し，魚捕りに用いた．シキミの樹皮の煮汁は牛のシラミ取りに用いられた．

低木類の葉は飼料や食用，神事，仏事に用いられている．アオキは家畜の飼料に用いられていた．アオキが飼料に適することはこれまでにも報告されており（上原，1959），各地で広く利用されていたのであろう．しかし，かつて当地区に繁茂していた（初島，1970）アオキを地区周辺の山野で見かけることが近年少なくなっている．牛馬が好むアオキは同時に近年当地区で高い生息密度が報告されているニホンジカ（矢部と小泉，2002；小泉ら，2003）の好むところとなり，摂食圧のために個体数が減少したと考えられる．関東地方でもシカの食害によるアオキの減少が報告されている（蒲谷，1998）．一方アセビの葉には摂取すると腹痛や嘔吐を引き起こすグラヤノトキシンという有毒なアルカロイドが存在し（Plumlee et al., 1992），これを摂食したヒツジの死亡例も報告されている（Power et al., 1991）．漢字で「馬酔木」と書くのも一説には馬がこの葉を食べて足が不自由になり酔ったように見えることからとされている（植物文化研究会と木村，2005）．この毒のためシカに食べられないので，シカの増加に伴い当地区の山野で他の植物に取ってかわりアセビが一面に広がる景色が一般的になってきた．サカキの葉が神事に，シキミの葉が仏事に用いられるのは日本に広く認められる風習である．関東地方等でサカキの代わりに神事に使

われるヒサカキは当地区では生育しているものの，神事には用いられていなかった．クサギやニワトコの葉は食用にされ，特にクサギの葉を油で炒めてご飯に混ぜたくさぎ菜めしは郷土料理として親しまれている．サンショウの葉は実とともに香辛料として各種料理に使われる．サンショウの葉はまた盆に「しょうろうさん」を送る前日の供え物の上に載せられる．リョウブの若葉は広く食用として知られている（平井，1996）．しかし，当地区では普通に見かけるものの（井上ら，2002）食用とされることはない．山菜として広く利用されているコシアブラの葉も当地区では利用されておらず（内海ら，2007），地域による嗜好が存在するのは興味深い．

チャノキの葉を飲用することは昔から行われていた．当地区でのチャノキの栽培は昭和40～50年代まで行われていた焼き畑農業と関連している．3月末～4月中旬に焼き畑の火入れを行い，スギ，ヒノキ，クヌギなどの植林をしたあとでヒエを蒔き，翌年からはアワ，アズキなどを作った．この焼き畑では春から夏にかけて萌芽が比較的多く見られる場所のチャノキを保育して葉の採取に利用した．最初の茶摘みができるようになるには3～5年を要した．造林木が成長してチャノキが被圧されるようになると，新たな茶畑を開設した．焼き畑が盛んだった当時は茶畑も潤沢にあり，採取に困ることはなかった．

茶葉の採取は手摘みでおこなわれ，採取した茶葉は鉄製の釜で強火で炒ったあと，むしろやござに広げてしっかり手揉みした．この作業は茶葉を細長く棒状に仕上げるため重労働になった．この後も中火から弱火にした釜で炒った後にもむ作業を3，4回程繰り返して仕上げ，各家庭毎に当年分まかなえる量を作った．製品として販売することはほとんどなかった．こうして作られた釜炒り茶の水色は透明感のある黄金色になり芳香があって美味である．釜炒り茶を作るためには多大な時間と労力を要するので，現在では手摘みした生茶を地区外の製茶業者に持ち込んで仕上げてもらうことが多くなっている．

チャノキでは実から得られる油も食用に供されてきた．実から油をとるにはまず実を乾燥させて中の種子を取り出し，石臼で外皮を取り除く．これを平釜で香ばしくなるまで炒り，シュロ皮でくるんだ後，木の板で挟んで「矢」と呼ばれるくさびを打ち込んで圧搾し油を得た．チャノキと同じツバキ科のヤブツバキの種子から油が取れることは広く知られている（上原，1959；土井，2001）が，ヤブツバキに比して小さな種子（浅野，1995；茂木ら，2000）から油を取る苦労は大きかったようである．油の香りは良く（当地区では「かばしい」と呼称），一升瓶で保存され大切に使われた．

果実を食用にしたものではイチゴが筆頭であろう．当地区ではウラジロイチゴ，クマイチゴ，ナガバモミジイチゴ，フユイチゴにはそれぞれ方言が与えられ食用とされている．なかでもナガバモミジイチゴが一番美味というのが共通認識で，さわやかな甘味と適度な酸味がある．そのほか種では区別していないがガマズミ類やグミ類の実が食用とされた．ガマズミ類は一度霜にあたったものが甘味が増しておいしくなる．グミ類は当地区にはアキグミとナワシログミがあり，椎葉村不土野地区の報告（斉藤と椎葉，1995）ではアキグミは甘いのでよく食べ，ナワシログミは酸味が強く食べないとされているが，本調査では両者の区別は認められなかった．ケケンポナシの果柄も自然の甘味として好まれた．そのほか塩分を含むヌルデの実や辛みのあるアブラチャンの樹皮がおやつ代わりにしゃぶられた（当地区では「せぶる」と呼称）．イヌガヤの実も食べたがおいしくはなかった．ヌルデの虫瘤（虫えい）は聞き取りを行った方々の祖母の代にお歯黒の材料として用いられた

そうである．

本調査では和名と同じものを含めても方言名が存在しなかった樹種が78種中20種と約26％を占めた．これは前報（内海ら，2007）の高木における約10％（69種中7種）と比べて高い値である．この理由は2つ考えられ，1つは過去に存在してた方言が時間の経過とともに失われてしまったことである．当地区で過去に方言の記載があるにもかかわらず本調査時には失われたと考えられる樹種はイソノキ（ニガキ，キクラゲノキ，これ以下，初島住彦（1970）の記載による），コツクバネウツギ（ヤボシタギ），コアカソ（イラクサ），ハナイカダ（ママコナ），ツルシキミ（アセビ），シラキ（シラキ）である．高木に比して低木は利用頻度が小さく，方言が失われる速度が早いのかもしれない．

2つめの理由として，存在は認識されているものの用途がないためそもそも名前が与えられていない樹種があったと考えられる．たとえばウツギ類のなかで白い花を咲かせ一般には卯の花として親しまれているウツギに当地区では名前が与えられていない．当地で「ウツギ」といえばツクシヤブウツギかノリウツギを意味する．この両種は材や樹皮が生活に必要とされたが，ウツギは何の役にも立たないので名前がないのであろう．旧暦5月の長雨「さみだれ」には「卯の花腐（くだ）し」の別名もあるが，ツクシヤブウツギは花が赤色であり，ノリウツギは夏の花なので，当地ではうまく季節感を表していないことになる．同様に樹皮に大きなとげがあり特徴的なカラスザンショウにも名前は与えられていないようである．ウツギやカラスザンショウに名前がないのは当地区および同村の不土野地区での既往の報告でも同様である（初島，1970；斉藤と椎葉，1995）．このように当地区の方言は花にはあまり関心を払っていないと思われるが，シキミにはハナシバの名が付されている．現在でも仏事に使われている木であり，その花に聖なるものを感じていたのだろうか．

採録された方言名は木の性質を良く表している．たとえばカナモドシ（和名カマツカ）は鋼で切ろうとしても切れないほど強靭なことから，ツキデノキ（和名キブシ）はその髄を子供たちが棒で突き出して遊んだことから，タケツエギ（和名シロモジ）は材が硬く，細身の通直な枝が取れて杖に適することからつけられている．これらの樹種には同じような方言が日本の各地で報告されており（倉田，1963；八坂書房，2001），以前は多くの山村で同様な使われ方をしてきたと考えられる．ハイノキの方言イノコシバの由来はイノシシの肉を包むのに具合が良かったからとも，獅子を背負うときに背中にはさんだからとも言われており，枝から葉が離れにくい性質をよく表している．もう一つ興味深い方言名にミソウシナイがある．これはネジキの方言で，この材で焚き火をすると味噌に似た色の灰ができるので，山で味噌焼きをした時この灰に落ちた味噌がいつの間にわからなくなってしまった，という山人の話から来ている．倉田（1969）は著書「植物と民俗」のなかで鹿児島の民俗として「灰が焼味噌の色態と変わらぬくらい似ているので囲炉裏で味噌焼きするとき灰中に味噌が落ちてもわからない故」と紹介している．実際に，ネジキの灰を味噌と見間違えるかは今後の検討課題である．

謝　辞

調査にあたっては大河内地区在住の椎葉治美，松子夫妻，藤岡盛重，ミヤ子夫妻，椎葉

司，君代夫妻，中竹和蔵氏に多大な御教示，御示唆をいただいた．椎葉村の統計資料については椎葉村総務課広報統計係長の那須力男氏に御協力いただいた．以上の各氏に心より御礼申し上げる．

引用文献

浅野貞夫（1995）：芽ばえとたね―植物3態/芽ばえ・種子・成植物．全国農村教育協会，東京，280p

初島住彦（1970）：九州大学宮崎演習林の植物．九大農演報**44** 別冊：1-80

平井信二（1996）：木の大百科．朝倉書店，東京，642p

井上　晋・内海泰弘・大槻恭一・岡野哲郎・古賀信也・田代直明・中井武司（2002）：九州大学の森と樹木．九州大学農学部附属演習林，福岡，p. 159

蒲谷　肇（1998）：東京大学千葉演習林荒樫沢における常緑広葉樹林の下層植生の変化とニホンジカの食害による影響．東大農演報**78**：67-82

貴島恒夫・岡本省吾・林　昭三（1977）：原色木材大図鑑．保育社，大阪，p. 204

小泉　透・矢部恒晶・椎葉康喜・井上　晋（2003）：距離標本法によるニホンジカの密度推定．九州森林研究 **57**：131-134

倉田　悟（1963）：日本主要樹木名方言集．地球出版，東京，p. 291

倉田　悟（1969）：植物と民俗．地球出版，東京，p. 328

倉田　悟（1975）：樹木民俗誌．地球社，東京，p. 169

茂木　透・勝山輝男・太田和夫・城川四郎・高橋秀男・吉山　寛・石井英美・崎尾　均・中川重年（2000）：樹に咲く花―離弁花〈**2**〉．山と渓谷社，東京，p. 719

沼田　真（1974）：生態学事典．築地書館，東京．p. 519

Plumlee, K.. H. VanAlstine, W. G. and Sullivan, J. M. (1992): Japanese pieris toxicosis of goats. J. Vet. Diagn. Invest. **4**: 363-364

Power, S. B., O'Donnell, P. G. and Quirk, E. G. (1991): Pieris poisoning in sheep. Vet. Rec. **128**: 599-600

Random House Australia (1999): Trees and shrubs. Random House Australia., Sydney, p. 1008

斉藤政美・椎葉ク二子（1995）：おばあさんの植物図鑑．葦書房，福岡，p. 219

椎葉村（1994）：椎葉村史．椎葉村，椎葉，p. 1107

植物文化研究会・木村陽二郎（2005）：図説 花と樹の事典．柏書房，東京，p. 589

土井高太郎（2001）：特用林産物としての「ツバキ」－東京都利島、大島から－．林業技術 **708**：12-15

上原敬二（1959）：樹木大図説 3．有明書房，東京，p. 1300

内海泰弘・井上　晋（2007）：椎葉の樹木51　ネコヤナギ．広報しいば **639**：18

内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上　晋（2007）：宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法　I高木．九大農演報 **88**：45-56

矢部恒晶・小泉　透（2002）：九州中央山地小流域の造林地周辺におけるニホンジカのスポットライトセンサス．九州森林研究 **56**：218-219

八杉龍一・小関治男・古谷雅樹・日高敏隆（1996）：岩波生物学事典　第4版．岩波書店，東京，p.2027

八坂書房（2001）：日本植物方言集成．八坂書房，東京，p. 946

（2007年10月31日受付；2008年２月５日受理）

Summary

The traditional name and usage of plants growing in Okawachi Settlement of Shiiba Village were investigated. The present study showed the result of 79 species and seven groupers of shrubs by hearing investigation from the learned elder of the settlement following the previous report of the arbors (Utsumi et al. 2007). The wood of five species was used for the handle of ax, sickle, chopper, hammer and saw. The selection of these species was made in view of the balance between the strength and weight that the each instrument needed. The bark of five species was used for raw material of Japan paper and the bark of two other species was used for making birdlime. The loss of dialect in shrubs was about 26 % and higher than the arbors. The dialect of these species would be vanished with the time or have no name always because these species have no usage.

Key words: Shiiba, Okawachi, shrub, dialect, traditional usage